

# まち、或いは母

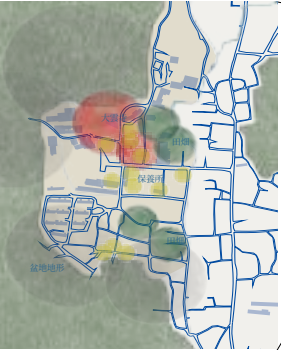
## 00 母を失ったわたし

0-1 引きこもるわたし  
 家から出れない、洋服・食事などの生活ができない人たち。うつ病などの精神疾患、発達障害、自閉症、様々な理由はあるけれど、その理由は一元的でない。そして、わたしも、ある日突然家から出られなくなった。日が来るかもしれない。もはや、私たちが仲間だとは思えないのだ。  
 現代の時間軸に適合できなくなった人たちに焦点を当てて  
**救う人、救われる人**という従来の福祉の形ではなく、**私たちが共に在る**という新しい福祉の形を目指す。

0-2 家族の解体と解放  
 家から出れなくなった時、人に会わなくなる、会えなくなる、症状が悪化するというサイクル。この時、「**家**」という内にある外的要因があれば、そこから抜け出すことができるが、ひとりである人たちはこのサイクルから抜け出すことが困難だ。では、家族のかけこみは孤独であるしかないのか。ジェンダー的役割によって定められた、「**家**」は解体されるべきではないか。場所、時間、空間などどこから来る感情なのだろうか。家や、故郷への愛着、その断絶感、閉塞感、閉塞感からくるものとしたら、私たちの中にある母への渴望は、

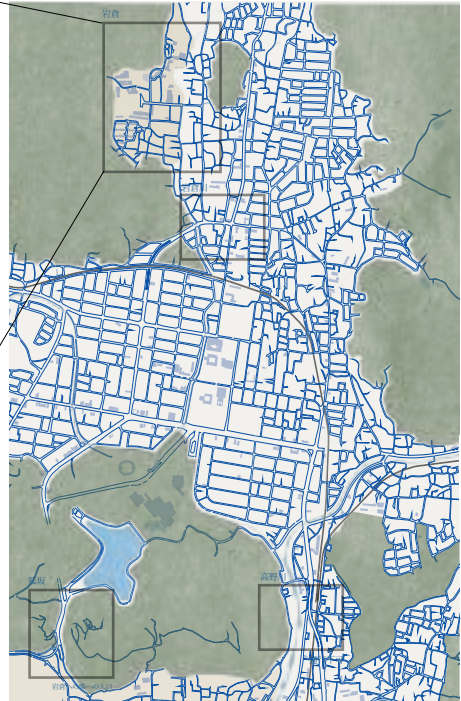
## 01 京都岩倉から考える

### 1-1 岩倉の地形分布



そんなとき、一般家庭で精神病患者を預かりながら生活していた村、京都岩倉に出会った。  
 本拠地は、京都岩倉で起きたことを調査しながら、現状において「**私たちが共に在る**」方法を探っていくものである。

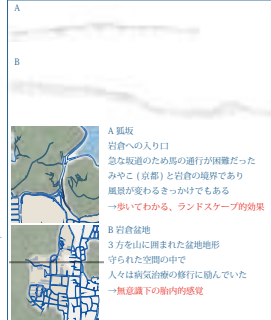
京都岩倉は、その豊かな地形と岩倉川によって農作が盛んな地域である。当時、孤児の影で都まで農作物を出荷するのが困難だったため、貴族が別荘として岩倉の農作物を買い取りにきていた。やがて、貴族は岩倉を逃避行の場所とし、隠し子を預けようになる。  
 そこで、大雲寺による「御水之由來」が起きる。疫病が治ると聞きつけた全国の人たちが大雲寺を訪れ、修行をするようになる。  
 大雲寺を去れる人が増えること、場所が必要となる。周囲の農家は自主的に「こもりや」という休憩所を始めた。「こもりや」はやがて住人のいる宿屋「茶屋」になり、家族は安心して精神病患者を岩倉にひとりでも預けられるようになった。最終的に下宿所は「**保養所**」と名前を変え、多くの精神病患者を預かり、**共同生活**を過ごした。  
 この預かりによる家族看護は決して善意だけで成り立っていたわけではなかった。農作という不安定収入源に頼っていた農家に、宿業という**安定した収入**ができ、農業に就くことができない人も介人という**新しい仕事**が与えられたのだ。  
 この家族看護は約100年続き、現在の岩倉病院では精神科の開放医療が行われている。



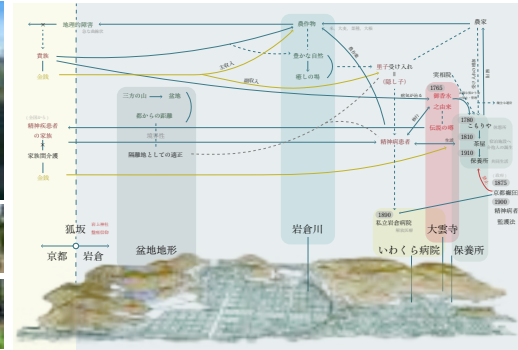
### 1-2 岩倉の風景



### 1-3 岩倉の地形効果



### 1-4 岩倉 ANW 図



### 1-5 保養所の分布と分析



### 1-6 各保養所について

それぞれの保養所は、生活療法が充実していたり、患者と共に家畜を飼育していたり、女性/子供を受け入れる家があったりと、個性があった。  
 しかし、保養所はそれぞれ壁で囲われ分離されてあり保養所同士の繋がりはなかった。

大雲寺参道沿いに保養所が生まれる  
 岩倉川を中心、半円状に保養所が広がっていく

①城守保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 2,000㎡  
 建物数 20棟  
 定員数 422人  
 1904年頃

②井原保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 1,000㎡  
 建物数 10棟  
 定員数 20人  
 1904年頃

③朝山保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 1,000㎡  
 建物数 10棟  
 定員数 20人  
 1904年頃

④西川保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 1,000㎡  
 建物数 10棟  
 定員数 20人  
 1904年頃

⑤磯辺保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 1,000㎡  
 建物数 10棟  
 定員数 20人  
 1904年頃

⑥村松保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 1,000㎡  
 建物数 10棟  
 定員数 20人  
 1904年頃

⑦赤山・福井保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 1,000㎡  
 建物数 10棟  
 定員数 20人  
 1904年頃

⑧朝日・加藤保養所  
 1904年頃  
 敷地面積 1,000㎡  
 建物数 10棟  
 定員数 20人  
 1904年頃

【共用】 客間/牧場/風呂場など。門の側に後し、原家を繋ぐ中間領域として設けられている。  
 【家主の部屋】 客間と養護部屋両方に繋がる場所に位置する。  
 【養護部屋】 客間と養護部屋両方に繋がる場所に位置する。  
 【中庭】 外壁と家の間に庭を内包する。  
 【門/入り口】 1家庭につき一箇所まで管理されている。橋に裏口がある。

①城守保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

②井原保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

③朝山保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

④西川保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

⑤磯辺保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

⑥村松保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

⑦赤山・福井保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

⑧朝日・加藤保養所  
 ・大雲寺の宿屋を改修して保養所  
 ・中庭として機能  
 ・一人暮らしの下部  
 ・作業場としての機能

4-1 地形的アプローチ

岩倉の地形から考える

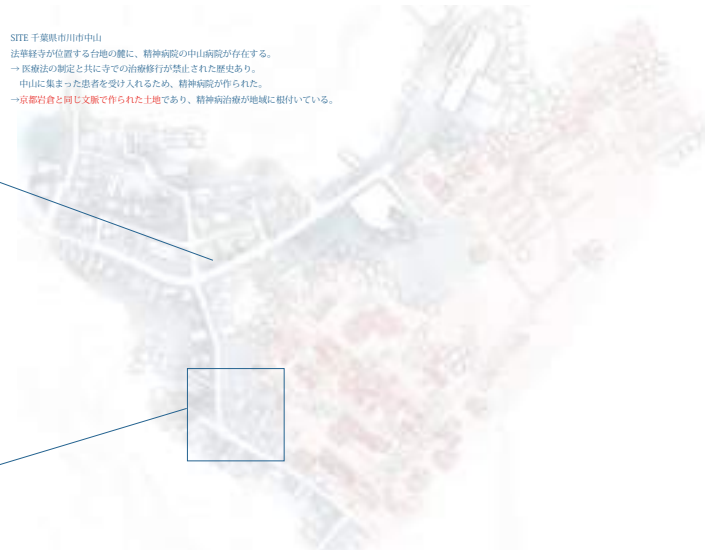
【直内的感覚】

法華経寺に沿うように取れた谷状地形

台地の上に寺院ができ、 → 低い場所に住宅が生まれた

【ランドスケープ的地理】

住宅群と寺院群を繋ぐ入り口。曲がり角、高低差と共に風景が変わる



4-2 ネットワークアプローチ

岩倉の材料成り立ちから考える

(岩倉) (中山 / 設計)

大雲寺というコアを中心に保護 → コアとしての意識が薄れた法華経寺に代えて、坂の起点に新しくコアを設計。坂を下げた先に住宅群を設計。コア・住宅群 - 寺を円環状に繋げていく。

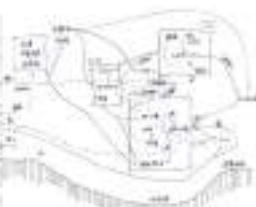
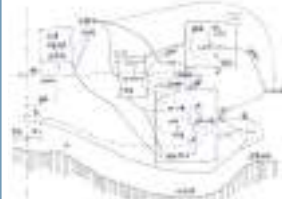
(岩倉) (中山 / 設計)

大雲寺参道沿いに保護所がうまれる。 ↓

地形をきっかけに中山のウラとオモテを繋ぐ道を花つづける ↓

岩倉病院を中心に、半円状に保護所が広がっていく。 ↓

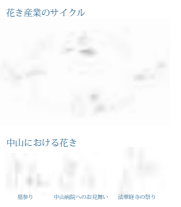
花き畑を中心に、円状に下宿舎が広がっていく。



4-3 まつりと花

中山の年中行事

1月1日	新年祈願会	6月24日	唐土公大祭
2月10日	大雲寺開行会	7月18日	御薬師勧進
5月9日	振甲勧進会	10月1日	八丈土大祭
8月9日	振甲勧進会	11月1日	大雲寺入行会
4月8日	花まつり	11月15日	御成式
4月15日	子供会	12月28日	納めの子供会
5月28日	法田願大祭	12月28日	おたまあげ
6月1日	宇賀正勝大祭	12月31日	除夜祈願会



4-4 点、線、面

【今】

地形的分断

病院ポイド

住宅コロニー

寺ポイド

【ポイド】

寺院はポイドを生み出し、人々の居場所を作り出している。中山は「寺ポイド」「病院ポイド」「住宅コロニー」に分けることができ、それらは地形的に分断されている。

【道】

東からの接続

参道の集まり

【道】

ポイドとなっている空間にも強い方向性があり、それぞれが参道の持つ力である。「寺ポイド」と「住宅コロニー」を繋ぐのは一本の坂道だが、裏道のように寺ポイドに接続する道がいくつか存在する。

【建物】

台地にはたくさんの寺が集まり、それに回り込むように谷地に住宅がある。

【設計】

【ポイド】

池周りのポイドを花き畑とし、その畑のかけらが庭や中庭に埋め込まれていく。花き畑ポイドは寺ポイドの文脈を受け継ぎ、人々を受け入れるように振る舞う。

【道】

【道】

分断された建物の間を縫うように、奥性をともなった道が引かれていく。入り込んだ道は血管のように、まちを住宅群内部に引き込んでいく。

【建物】

【建物】

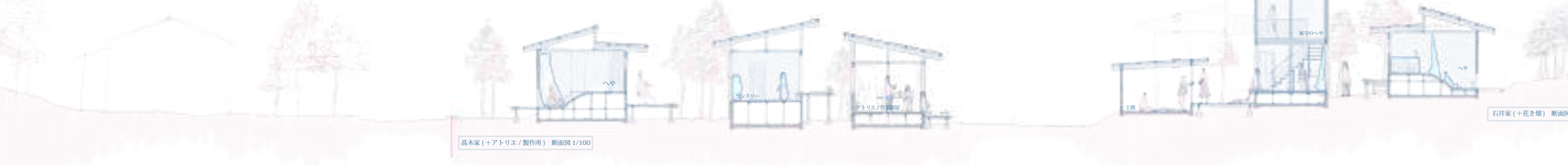
花き畑を中心に、花き産業のプログラムがまち / 寺に広がっていく。花きは寺と結びつき、まちにハレとケ、四季を与える。接続点：花屋、雑貨屋、墓地、病院

04 地形と共に

なる地形に呼応するように、そっと、群れとしてのいえを設ける。

の景色と結びついて、へやの中に谷地ができる。

地形に沿うように、そして微地形を作り出すように置かれたスラブは、「へやに降り」「まちに出る」という意識を作り出し、細かな視線のズレによって奥の「へや」は守られる。





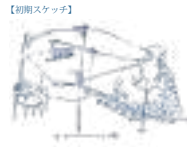
06 へや-いえ-まち

へやに回るようにまちを歩き、まちに回るようにいえで暮らす。  
 へや-いえ-まち、3つのスケールで考えてみる。  
 中山の地形と対応しながら、内なる場所を作り出すと共に、外の世界と接続する「境界」を設計していく。  
 へやが、いえが、まちが、それぞれの身体スケールを持ちながら私たちの身体の中に刻まれ、  
 へや-いえ-まちの空間的関係をが溶け合っていく。



5-1 へや

へやは最も身体に等しい場所である。  
 例えば、うつ病の症状が激しい日は、1日を寝たまま  
 で過ごす事になる。  
 だらりと寝転がった視線の先に見えるもの、床こそが  
 最も私たちの身体となるべき場所である。  
 緩やかな傾斜を持った床スラブは私たちの身体に寄り  
 添い、広がる地形と対応して谷を作る。  
 そうして作られた場所は、うつ病でないあなたの身体  
 にも寄り添い、母となる。



外の景色を内包するよう、縁線を引き込みながら、奥に行くにつれ、周囲の斜面と対応するような板が現  
 れる。  
 この板によって、へやの中に「外と繋がる谷」が生ま  
 れる。  
 部屋のモノ/コトは棚下に隠れ出し、中山の風景  
 のひとつとなる。  
 縁線に隠れた谷状地形は身体化された母性(ははせい)  
 を生み出す。

5-2 いえ

へやは集まり、いえとなる。  
 暮らしと共にある仕事として、花き産業の動線を挿入する。まちのように作られたいえは、時と場所さまざまな選択型を与える。  
 住まい手は、うつ病などの精神疾患を抱えた人、上京してきた学生、預り身の成人など、それぞれは個人のまま、場所としての家族を紡ぐ。

【「家」の解体と再構成】



個としてのへやが集まる。へやに付随するように、場所の  
 から合理的に、今回は中山  
 の花き産業の動線と労働のモ  
 ーションを持ち込む。  
 産業の作業場を設け、産業を  
 でのんびり、今後は中山  
 一つの家を築出し、まちの家  
 を繋いでいく。  
 産業動線のひとつ後ろに活動  
 を設ける。生活動線はいた  
 の外から与えられる。また、建  
 築動線として、中庭のマイエ  
 を開く。  
 いえの精神的中心として家守を  
 配置。家守のへやははなや  
 が見渡し、一部の付いたに開  
 いて広場となる。

黄色の作業動線がいえといえを結び、その一つ奥に桃色の生活動線が広がる。  
 いえの単位は3-6F+家守とし、いえの範囲は道路や街区をまたぐものとする。  
 街区に沿ったXY軸は、詳細な操作で個性を生み出す。  
 その家は中山の寺町の計画と繋がり、中山は写りてきた場所のかたちとして現れていく。  
 そうしてきたいえは、まちを内包していく。

6-1 坂道の拠点

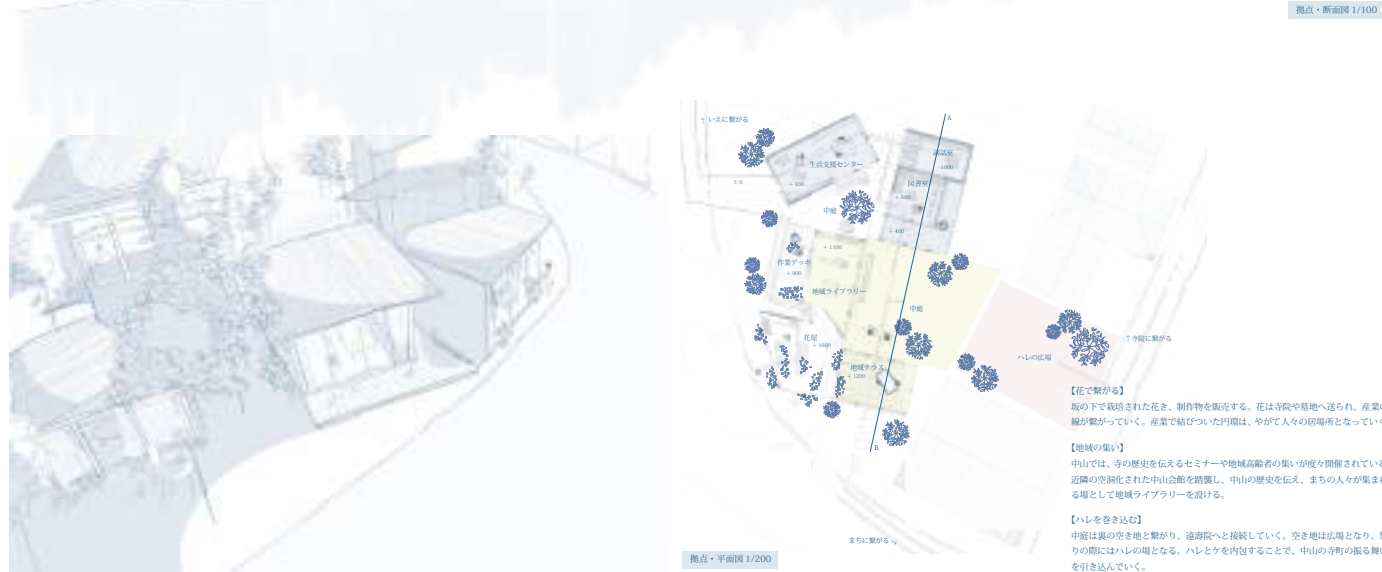
法華経寺参道と車の住宅を繋ぐ坂をこの場所の境界とし、起点の建物を置く。  
坂道の起点は岩倉の狐坂のように母なる場所と外の都市を繋いでいく。

私たちのいえ、そして身体を囲むは円環状に広がっていき、まちを歩くことで自分の居場所を見つけていく。  
そして、その経験こそが、場所に愛着と故郷を見出す母なる体験であるのだ。

【うえとした】  
坂の上から来る人たちのための場所、坂の上のまちに接続する場所を設け、それらをデッキ、外部空間が繋ぐ。



拠点・断面図 1/100

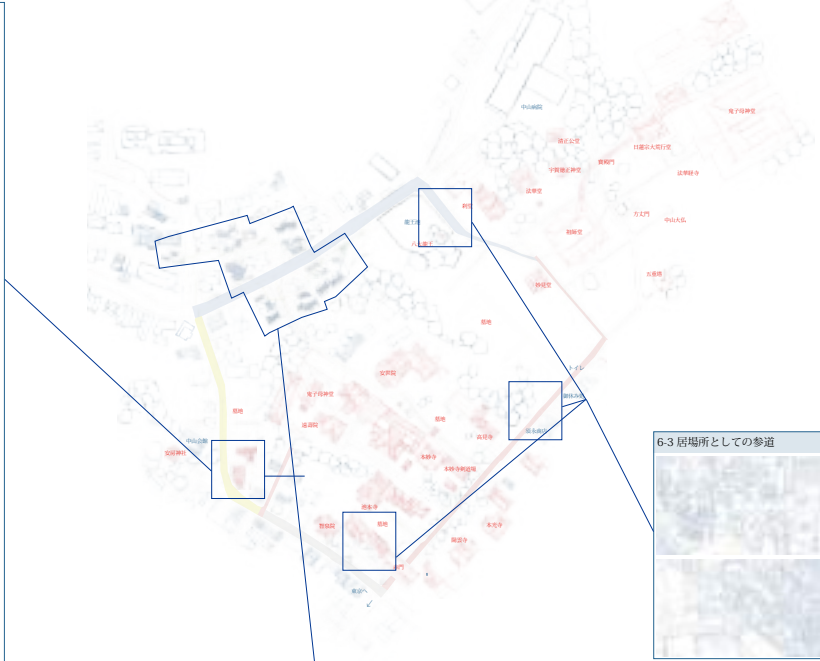


拠点・平面図 1/200

【花で繋がる】  
坂の下で栽培された花さ、制作物を販売する。花は寺院や墓地へ送られ、産業の輪が繋がっていく。産業で結びついた円環は、やがて人々の居場所となっていく。

【地域の集い】  
中山では、寺の歴史を伝えるセミナーや地域高齢者の集いが度々開催されている。近隣の空洞化された中山会館を踏襲し、中山の歴史を伝え、まちの人々が集まれる場として地域ライブラリーを設ける。

【ハレを巻き込む】  
中庭は裏の空き地と繋がり、遠遊院へと接続していく。空き地は広場となり、祭りの際にはハレの場となる。ハレとテラスを内包することで、中山の寺町の賑わいを引き込んでいく。



6-3 居場所としての参道



6-2 屋根のながれ

古くからの寄棟屋根の住戸が多く存在する中山で、その家の単位を解体するための手がかりとして妻の流れに着目。

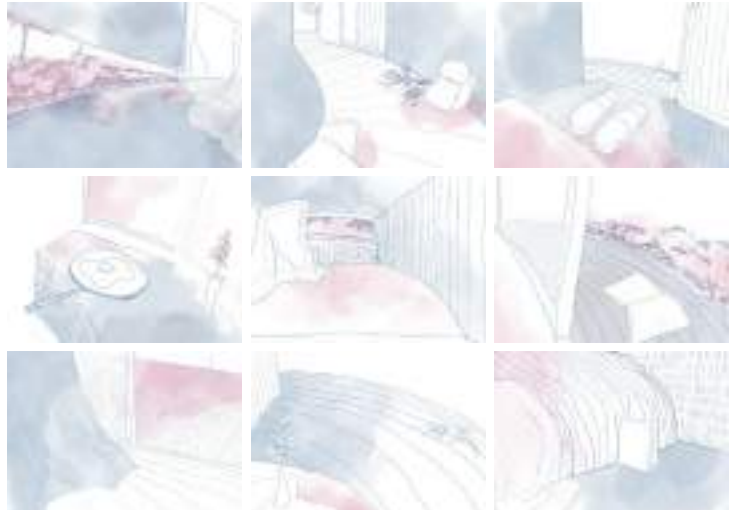
中山の風貌を守りながら、屋根を分解し、その期間に道を張り巡らしていく。



07 円環の中で

プログラム/円環としての平面と地形としての断面は重なり、社会の時間幅につまづいた時、わたしたちの時間と身体は円環状に縮小していく。  
計画と感覚の狭間で私たちの居場所を作る。  
あのへやが、あの木の下が、あの境内が、時に私たちを包み込み、記憶と場所は私たちの身体に刻まれる。

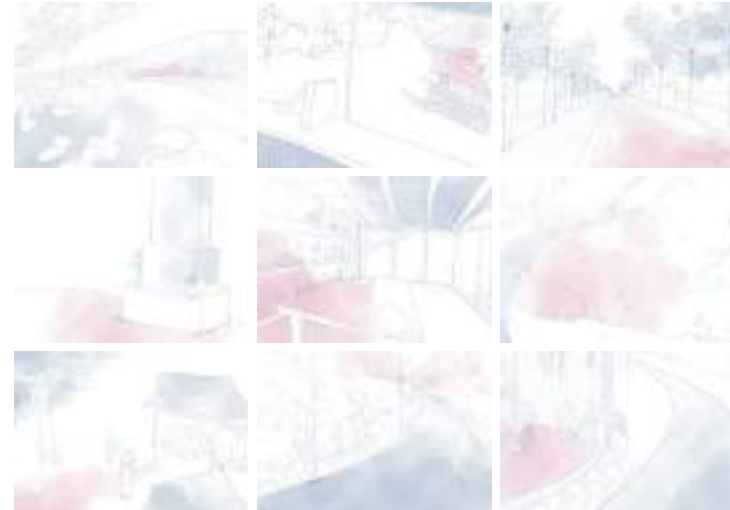
【へや】



【いえ】



【まち】



柔らかな境界と母なる場所がわたしたちを包み込んだ時、その円環はゆっくりと拡張していくのだ。